

医学の進歩で 生かされて迎えた 60歳



札幌市医師会
LSI札幌クリニック

やま だ とも のり
山 田 有 則

皆様、明けましておめでとうございます。今年は5回目の年男ということで、ちょうど還暦となります。60年を振り返ると、様々な病気を患いながらよく60歳を迎えることができたというのが率直な感想です。医学の進歩のおかげで生かされてきました。

最初の病は、旭川医科大学の学生であった22歳時に精巣の胎児性癌ステージⅢAを患いました。春から腰が痛く、風邪でもないのに熱が出て体調不良が続きました。夏休みに入り同級生のお父さんが整形外科医であったため診てもらったところ左鎖骨上リンパ節が腫れており、市立旭川病院の血液内科に入院となりました。左鎖骨上のリンパ節を1個摘出してついた診断は胎児性癌でした。今思えば、腰痛は大動脈周囲のリンパ節転移が原因で、熱は腫瘍熱であったと考えます。しかし精巣に腫大はなく、当初は精巣由来なのか精巣外原発なのかはわからなかったようです。当時はまだ癌を告知する時代ではなく、病名は伏せられたまま旭川医科大学病院の泌尿器科に転院となりました。そこで先生たちが私の命を救うために考えてくれた治療が、旭川医科大学では初となる自家骨髄移植併用超大量化学療法でした。当時はまだ自家骨髄を腸骨から採取する時代で、札幌北楡病院で自家骨髄を採取保存し超大量化学療法が始まりました。また旭川医科大学に無菌室がなかったため、泌尿器科の個室に空気清浄機を取り付け簡易無菌室も作っていただきました。制吐剤はプリンペランしかなく、白血球を増やすG-CSF製剤もない時代でしたので、吐き気はひどく白血球の減少や貧血には輸血で対応、白血球が極限まで下がる1週間は無菌室で回復を待つという化学療法を3クール受けました。3クルールの治療で体重は65kgから49kgへ減少、3クール終了時は無菌室からは歩いて出ることができず、車椅子で出てきました。末梢神経障害で足と手の指先の感覚がおかしくなり、字を書いたり洋服のボタンを留められないほどでした。辛い治療のおかげで腫瘍マーカーは正常値となり、腹部リンパ節の腫脹も消失しましたが、左鎖骨上リンパ節が縮小せず手術ということになりました。今ならPET検査で癌細胞が死んでいるということがわかったでしょうが、手術にて左鎖骨上から頸部のリンパ節を郭清し癌細胞が全て死んでいることを確認し約6か月の治療が終わりました。超大量化学療法、当時は最先端でしたが、泌尿器科の先生にお話を聞いたところ、今は最初からはやらな

いとのことでした。

癌治療が終わる頃から、今度は肝機能が上昇してきました。輸血で非A非B肝炎（当時はC型肝炎ウイルスが未発見）に感染していました。肝生検で活動性肝炎と診断され、このままいくと20年ぐらいで肝硬変から肝癌になるという予想でした。その後C型肝炎ウイルスが発見され、肝炎感染から3年後ぐらいに治療薬としてインターフェロンが登場しました。肝臓の主治医にお声がけいただき、最初のインターフェロンの治験に参加しました。ウイルスは消えませんでした。非活動性肝炎に落ち着きました。その後、様々な種類のインターフェロンが登場するたびに治療を受けましたが、肝炎ウイルスが消えることはありませんでした。20年ほど治療を繰り返しているとインターフェロンに代わり経口の抗ウイルス薬が登場、副作用は全くなく1か月でウイルスが陰性となりました。医学の進歩に救われました。

次のピンチは腎機能の低下でした。シスプラチンを大量に投与されていたため腎機能の低下が早く、一時SGLT2阻害薬で持ち直しかけましたが再度低下し始め、昨年eGFRが50を切ってしまいました。このペースで低下していくと70歳位で透析になってしまうという見立てでしたので、どうしたものかと困っていました。そんな時に抗加齢の研究を長らく続けてきた森田祐二先生が私の勤務する法人に加入、幹細胞培養上清液を紹介してくれましたので、点滴治療を受け、eGFRが60近くまで回復するに至りました。保険診療で使えるものではありませんが、医学の進歩の一つで腎機能が救われました。

私は現在、LSI札幌クリニックでPET癌検診に携わっていますが、癌を患った身として皆様の癌を早期に見つけ命を守ることが天命だと思ひ、これからはしっかりと取り組んでいきたいと思ひます。